

山形大学工学部の地域限定AO入試の試み

山本陽史 (山形大学)

山形大学工学部が2008年度入試から導入したアドミッション・オフィス(AO)入試は、山形県内の高校に在学し、将来県内に就職を希望する高校生に出願資格を限定した独特のスタイルを持っている。本発表ではこのAO入試が実施されるに至った経緯とねらい、出願から合格発表まで4か月半を要したプロセスの詳細、得られた成果と浮き彫りになった問題点、課題に対する今後の改善方策について説明する。

1 はじめに

近年盛んになってきたAO入試の是非についてはさまざまな議論が行われている。特に定員割れを起こす大学が増加するにつれ、AO入試は多様な学生を確保するという本来の目的からややもすれば逸脱し、早めに学生を確保するための手段というイメージを世間を持たれるようになってきた。筆者は前任校(首都圏の私立大学)においてAO入試を経験したが、受験生の確保には一定の効果はあるけれども、その質の確保については大きな課題を抱えていると実感した。

国立大学の中には九州大学のようにAO入試を取りやめる大学も出てきており、その意味でもAO入試の意義がかつてなく問われていることは間違いない。

これから報告する本学のAO入試についても、実施前にはあるマスメディアの記者から「青田買い」ではないかという辛辣な質問を受けたり、高校の先生からもそのような趣旨の意見を頂戴したことがあった。そうではないことは説明してすぐに理解していただいたのであるが、AOは受験者確保の方便というイメージが広がっている現在、AO入試については具体的な説明をしていく努力が欠かせないことを痛感した。

さて、地方に立地する国立大学にとって、地元との連携を強化していくことは今後きわめて重要な意味を持っている。山形大学工学

部では2008年度入試からAO入試を導入したが、地元との連携を入試の面でも実現しようとする意味を持っている。

本AO入試の大きな特徴は、以下の3点である。

- 1 山形県内の高校と高等専門学校(3学年)に限定していること。
- 2 卒業後山形県内に就職を希望する者に限定していること。
- 3 山形県・山形県工業会と連携して入学後学生を指導していくこと。

初年度は工業高校を中心にして優秀な人材を入学させることができたと考えている。しかしこの入試が本当に成功したかどうかは、第1期生が卒業する4年後にならなければ厳密な検証ができない。その意味では本報告はあくまでも途中経過の報告となる。

2 実施に至る経緯

2.1 地元とのかかわり

山形大学工学部は従来から県内企業との受託研究など産学連携を積極的に展開してきた歴史がある。

就職状況は好調であるが、県内出身者の比率が2割程度と低いこともあり、県外の企業に大半が就職する状況であった。

上記のような状況から、人材の空洞化を懸

念する県内企業等から技術者の人材供給の要望が高まっていた。また、県内の高校、とくに工業高校からは入試制度の多様化が求められており、それらの声に応えるために山形県工業会とも協議の上、県内限定AO入試を導入することとしたのである。

2.2 本制度の意図

募集要項から本入試の意図について説明した記述を抜粋する。

山形県は一般的には農業県として知られていますが、実際には産業のほとんどが製造業（ものづくり産業）で構成されている、工業生産主体の県です。経済のグローバル化が進む現代社会において、山形県内の企業では、高等教育機関における学習・研究で身に付けた企画力・開発力と高度な技術とを持ち、同時に企業経営に関してもその一端を担えるような人材が求められています。

それには、県全体が協力し合って人材を育成することが必要不可欠となります。そのため、山形県内企業、山形県、そして山形大学工学部の三者が連携して、山形県を支えていくような人材を育てていこうとする制度がこの度スタートすることとなりました。

3 ねらいと入学後の支援策

3.1 ねらい

このAO入試には、本学として以下のようなねらいがある。

- 1 地域社会、特に企業との連携強化。
- 2 人材供給を通じた地元貢献。
- 3 高校との接触機会増。
- 4 多様な入試制度を設けることによるキャンパスの活性化。
- 5 他の入試区分で入学した学生への波及

効果。

3.2 入学後の支援策（予定）

以下のようなことを山形県工業会をはじめとする関係者と連携しながら実施する予定である。

- 1 企業との接点の拡大。
1年次の企業訪問・2年次からのインターンシップの実施（通常は3年次から）
- 2 就職活動への支援。
- 3 4年次における大学院授業の聴講。

4 定員と志望学科の関係

4.1 学科の偏りは許容

AO入試の定員を本工学部Aコース（昼間主コース）6学科の合計定員570人のうちの6人とした。各学科1名を供出した計算になるが、各学科で1名ずつ定員を割り振るのではなく、6名ほどの学科に入学してもよい、つまり学科の偏りがあってもよいこととした。

4.2 学科の志望変更

願書には志望学科を記入してもらったが、後日の変更（第2次選考の面接時まで）を可能とし、面談時、面接時にその都度志望学科の変更がないかを確認することとした。

結果として志願学科変更者はいなかった。

5 選考の経過

5.1 関係各機関挨拶回り・募集要項配布

5月に募集要項が完成。山形県庁（商工労働観光部・教育庁）・山形県高等学校長会長・山形県工業高校長会長に挨拶回りに出向いた。

また、出願が予想される県内の工業高校を中心に募集要項を持参し、進路指導担当教諭に説明を行った。

5.2 出願受付

7月25日（水）～7月31日（火）。定員

6名に対して21名が出願。

5.3 第1回個別面談

8月3日(金)工学部のオープンキャンパス時に個別面談を実施。

面談では志望理由、アドミッション・ポリシーの理解度、将来の希望を重点的に聞いた。また、第1次選考の「レポート」で出題が予定されるテーマの大まかな分野と、準備の方法等について説明した。

当日来学できなかった者については、後日個別に来学してもらい、面談を実施した。

5.4 第1次選考

9月29日(土)。志願者21名のうち、2名が欠席。

選考内容は「レポート」。事前に通知した分野から当日与えた課題に対してその場でレポートを作成してもらうもの。具体的には環境問題に関する新聞記事を読ませ、800字以内のレポートを作成。

5.5 第1次選考合格発表

10月10日(水)。14名が合格。

5.6 第1次選考合格者に対する説明会

10月20日(土)。吾妻祭(工学部の学園祭)に来学してもらい、全体説明会を実施した。

説明会では通信課題の内容の説明と、第2次選考に向けての準備についてアドバイスをを行った。

5.7 通信課題(2回)の作成・提出

5.7.1 第1回

5.6節でふれた吾妻祭ではミニオープンキャンパスを実施し、研究室の一部を開放しており、第1次選考合格者に対して、志望学科の研究室を見学して、レポートを作成・提出してもらった。

5.7.2 第2回

ものづくりに関する内容のテレビ番組(NHK「プロジェクトX」)のDVD(人数分購入し自宅に郵送)を視聴してもらい、レポートを作成・提出してもらった。

5.8 第2回個別面談

11月中。志願者と教員で日程を調整し来学してもらい、個別面談を実施した。通信課題についての質問を受けるとともに、第2次選考に向けての準備の進捗状況について聞いた。

ただし、遠隔地に居住する志願者数名に対しては、アドミッション・サービス担当教員が高校を訪問し、個別面談を実施した。

5.9 第2次選考

12月1日(土)。選考内容は「プレゼンテーション」と「面接」。

当日与えられた課題に基づき、パソコンでプレゼンテーションの資料を各自が作成し(パワーポイントファイル)、5分間のプレゼンテーションを行ってもらった。終了後質疑応答を行い、引き続き面接を実施した。

5.10 最終合格者発表

12月13日(木)。併せて、合格者に対し入学予定の各学科から入学前教育課題を送付。

5.11 第3回個別面談と入学前学習

2月にアドミッション・サービス担当教員による個別面談を実施。小論文と国語力養成の問題)を与えるとともに、入学時までの学習に対するアドバイスをを行った。小論文課題は3月中に添削、返却した。

6 最終合格者の内訳

6.1 倍率等

定員	6名
志願者	21名
志願倍率	3.5倍
第1次選考受験者	19名
第1次選考合格者	14名
最終合格者	14名
入学手続き者	14名

6.2 性別内訳

男性	13名
女性	1名

6.3 高校属性別内訳

普通科高校	2名
工業高校	11名
農業高校	1名

6.4 学科別内訳

機能高分子工学科	0名
物質化学工学科	3名
機械システム工学科	5名
電気電子工学科	3名
情報科学科	3名
応用生命システム工学科	0名

6.5 上記に関する見解

山形県内に限定した入試であることを考えると、倍率については学生の質を確保するためにほぼ妥当な数値であったと考えられる。

第1次選考合格者と最終合格者数が同じであることについては議論のあるところであろうが（選考の経緯については割愛する）、今後の合格者の追跡調査の中で妥当であったかどうかを検証していきたいと考えている。

7 本学部AO入試の長所と問題点

7.1 長所

- 1 県内に限定しているため高等学校側や志願者との面談等が容易で、志願者の学力や意欲などを把握しやすいこと。
- 2 一般選抜での受験が難しい工業高校等の優秀な生徒を確保する機会が増えたこと。

7.2 問題点

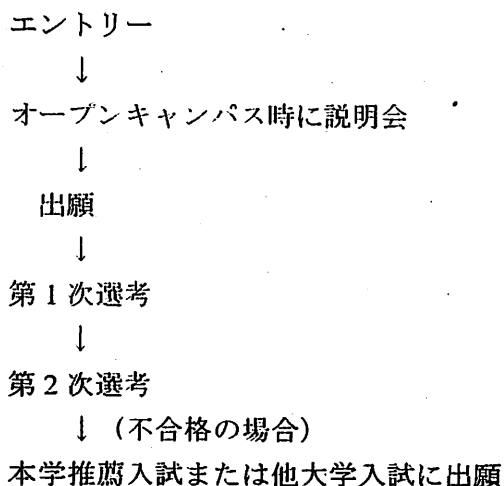
- 1 学力検査を経ないために学力を専ら調査書から判断することになる。
- 2 普通科高校以外の志願者は、カリキュラム上高校で学習が足りない、あるいは全く履修していない科目があるが、これをいかに補っていくかが課題である。
- 3 県内高校に限定されているために、出願に際して他校の出方をうかがう傾向があると思われる。
- 4 出願資格として「本学卒業後、山形県内に就職を希望する者」とあるが、4年後のことなので強制力はもちろんない。本当に県内の企業に就職する意志が持続できるかが問われる。

8 2009年度の改善点

2008年度の日程では第2次選考まで進んだ場合、工学部あるいは他大学の推薦入試に出願することができない。第2次選考で不合格となった場合、非常に不利である。そのことは高校回りの際にも進路指導担当教諭から指摘された。そこで、2009年度は以下のように改める予定である。

- 1 本出願の前に「エントリー」（仮登録）制度を導入した。エントリーをした者だけが、本出願できる。
- 2 選考日程を前倒しして、第2次選考で不合格となった場合でも工学部あるいは他大学の推薦入試等に出願できるようにした。

この結果、選考の流れは以下のようになる。



9 今後の課題

現在第1期生が新入生として学習を始めている。本学は分散キャンパスであるため、1年次は工学部のある米沢キャンパスではなく、山形市の小白川キャンパスで他学部生とともに教養教育を主に学ぶ。そのために学習状況・生活状況を日常的に把握することが難しいが、アドミッション・サービス担当教員が「担任」のような役割を担って、メーリングリスト等で連絡を取り合うこととして、ケアに努めていきたい。

なお、今後この学生たちと企業との接点をきちんと整備し、県内の企業へ就職する意欲の持続をはかることも重要である。

そしてこのことは、他の入試区分の学生に対しても良い波及効果を与えるものと考えている。

入学後の追跡調査を行って、AO入試をはじめとする入試制度の改善を図っていくこととしたい。

最後になるが、一般的にAO入試は導入初年時こそ良質の志願者が集まるが、以降は質の低下が見られる、と言われており（筆者の経験でも思いあたる節がある）、このような傾向に陥らないための工夫を行い、質の確保を図っていきたいと考えている。